
魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

czhs

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 一途な思い

【Nコード】

N0251Z

【作者名】

czhs

【あらすじ】

八神はやてが率いる新部隊その名を機動六課。この出来て二日目の部隊に異動してくる一人の魔導士がいた。これは機動六課と一人の魔導士が織り成す物語。

始まり（前書き）

初めまして『c z h s』と申します。ド素人なので温かい目で見てください。ありがとうございます。

始まり

はやて side

はやてとリインはある書類を見ていた。

「まさかあの人が来てくれるとは思ってなかったわ〜リンディさんに頼み込んだかいがあったちゅうもんや!」

「誰なんですかその人って?」

「うちやなのはちゃんそれにフェイトちゃんが前からお世話になつとる人や。ここ最近おうてへんから会うのが楽しみやわ〜」

二人が話してしるとドアをノックし二人の人物が部屋に入ってきた。

「はやてちゃん急に呼び出しなんて何かあったの?」

はやてに話しかける人物、栗色の髪をサイドポニーにして教導管の制服に身を包む管理局のエースオブエース、高町なのはだ。

「実はな今日他のところから異動してくる人がおるんよ。二人も知つとる人やから教えとこうと思つてな」

「私達も知つてる人?」

はやての言葉に首を傾げる金髪の女性。黒い執務管の制服に身を包んだフェイト・T・ハラウオンだ。

「せや、これがその人に関する書類や」

二人は書類を見ると同時に驚きと嬉しさのあまり声をあげた。

「えええええ!!!優君が来るの!?!」

「優が一緒ってことは…四人揃うのは三年ぶりだね」

「そうなんよ、はあくはやく来てくれへんかな」

優side

「ここが機動六課か…金使い過ぎだろ」

『まあ新築ですらね。それよりマスターあまり時間がありませんよ』

「そうだなありがとなアイリス」

『どういたしまして』

俺こと如月優と相棒のアイリスは六課の校舎前にいた。三日前にリンデイさんにいきなり異動させられたのだ。それも拒否権なしにな「アイツらと再び会うことになるなんてな…これもリンデイさんの策略かなんかなのか？」

『策略かどうかはわかりませんが少なくともあの人に限って悪意があつてやった事ではないと思います』

「そうだな…さてと行くか」

next

出向（前書き）

一話目です。やっぱり小説書くのって難しいですね……

出向

優side

「中に入ったはいいが部隊長室ってどこだ？」

『私に聞かれましても…』

「だよな」

こんな感じで俺達は六課の校舎内をさ迷っていた。受付の人が居なかったからまあしかたがないと思い自力で探していたんだが、一向に見つからない

「それに誰にも会わないとは…」

溜め息をついていると前から青髪とオレンジ髪の子達が歩いてきた。ちようどいいから聞いてみるか

「ちよつといいかい？」

「はい、何でしょうか？」

青髪の方が聞てくる

「部隊長室がどこにあるか教えてくれないか？」

「失礼ですが、どちら様ですか？」

今度はオレンジ髪の方が聞いてくる

「おっと名乗ってなかったな。俺は如月優一等空尉、本日から機動六課に異動して来た者だ」

「！？失礼いたしました。ティアナ＝ランスター＝二等陸士です」

「スバル＝ナカジマ＝二等陸士です」

「よろしくなティアナ、スバル」

「はい、では案内させて頂きます」

三人は部隊長室に向かった

はやてside

「優君と直接会うのは二年ぶりやな。今度どっかに連れてってもらおうかな」

「だめだよはやてちゃん、連れてってもらうのは私なんだから！」

「二人共、何言ってるの？優は私と出かけるんだよ！」
そんな事を言っているとティアナから通信がはいつた。

失礼します、如月一等空尉をお連れしました

「わかった、ありがとな」

いえ、それでは

通信が切れるとドアをノックして優君が入ってきた

「失礼します、本日より機動六課に出向します如月優一等空尉です。
一年間よろしくお願いします」

「機動六課部隊長の八神はやてです。六課はあなたを歓迎します。」

お互い敬礼し握手をする

「さて、堅苦しいのはしまいや。久しぶりやね優君」

「これからよろしくね優君」

「よろしく優」

「久しぶりだなはやて、なのは、フェイト！」

n e x t

思い（前書き）

三話目です。そういえば主人公の容姿について書いてなかったよ
うな……

思い

優達は軽く挨拶をした後、今後の事について話し合っていた。

「俺は何をすればいいんだ？」

「優君にはなのはちゃんとフェイトちゃんの補佐役かつ六課の副部隊長をしてもらうつもりや」

「つまり三人の付き人ってことなるのか？」

「まあそんな感じじゃ！」

話を聞き終わると優は少し俯き考えこんでいた。

地上本部からの呼び出しもあるからな…どうしよう…

その姿を見てなのはは恐る恐る尋ねた

「優君、私達と一緒にじゃいや？」

聞いてくるなのはの方を見ると少し目を潤ませ上目遣いでいた。よく見ればフェイトとはやても同じようにしている

「いやな訳ないだろ！ただ地上本部からも呼び出しがあるから四六時中一緒にはいられないぞ」

それを聞くと三人の顔がいつきに明るくなった。

「もちろんそのつもりや。仕事内容は個別に聞いてな「了解」じゃあ六課全員をホールに集めとるから挨拶しに行こか！」

「その前一つだけ言わせてくれ。三人とも…無理はするなよ」

「優（君）……」

「まあそれだけだ。はやくしないと置いてくぞ？」

「あ、うんって待ってよ優君」

四人は部隊長室をあとにする

(マスター…あの事言わなくて良かったんですか?)

(無駄な心配をかけたくないからな…それにできるならこの事は知られないほうがいい。俺にとってもあいつらにとってもな)

俺がやる事は一つ、あいつらを守る…ただそれだけだ……

n e x t

模擬戦 前（前書き）

四話目です。

とりあえずあと一話かいたら主人公設定を書きたいと思います。

模擬戦 前

俺は今柱の後ろに隠れている。何故かというとはやてに隠れてると言われたからだ。本人曰く皆を驚かせたいらしい

「皆忙しい中集まってくれてありがとな。集まってもらったんは今日から六課に出向する人を紹介するためや。それじゃ優君おねがい」

言われて出てみるとロングアーチ陣が「えええええ！？」と言いたそうな表情をしている。スバルとティアナは一度会っているからかそれほど驚いていない

「わざわざ集まって頂きありがとうございます。今日から機動六課に出向となりました、如月優一等空尉です。立場は副部隊長となりますが気軽に接して下さい。一年間よろしくお願いします」

「あの如月さんってもしかしてあの有名な『銀髪の断罪者』さんなんですか？」

リインが質問した瞬間、優の放つ空気が変わった。殺気を放つようにして…

「そう呼ばれることもあるができるだけその名で呼ばないでくれ…」

静まりかえる部屋内。その沈黙を破ったのは部隊長であるはやてだった

「ま、まあとりあえず自己紹介はこれぐらいにして、各自仕事に戻るか!」

優side

はあくやっちまったな〜無意識だったとはいえ初見であればいよなくこれからどうしよう……

そんな事を考えているとなのはとフェイトが話しかけてきた。多分さっきの事についてだろう。

「優君さっきはどうしたの?いつもの優君らしくなかったよ?」

「悪い、無意識のうちにあんな事になってた。ほんとにらしくないよな……」

「抱え込んだじゃだめだよ?何か悩み事があるならいつでも相談にのるから!」

「ああ、ありがとな二人とも。だけど大丈夫だよ」

「「うう／＼」」

そう言つて二人の頭を撫でる。二人共、顔を少し紅く染め恥ずかしそうに俯く。ちなみに頭を撫でるのは昔からの癖だ。

「さてとそろそろフォワード陣の訓練の時間だ、はやく行かないとな!」

「「うん!」」

そうやって三人は訓練所に向かった。優にこの後降りかかる不幸のことなんて知るはずもなく…

n
e
x
t

模擬戦 後（前書き）

五話目です。戦闘シーン…難しいです。

模擬戦 後

優side

今、俺達の前にはフォワード陣がきれいに整列している。ちなみにフェイトは執務官の仕事が急に入ったらしく途中で別れた

「じゃあ、早速訓練始めようかって言いたいところなんだけど今日は模擬戦の観戦をします。ということで優君お願いね」

はい！？そんなこと聞いてないぞ！っ！かなんでフォワード陣はいかにも「楽しみにしてます」的な視線で俺を見てんだ！

(マスターやるしかないですよ。それにあれを使わない程度なら問題ないと思いますが)

(…そうだな…：まったく先に言ってくれよ…)

「はあ…で、相手は誰なんだ？」

「私だ！」

出てきたのはバトルマン…：もといシグナムだった。目を輝かせながら、その右手にはレヴァンティンが握らていた。

「まったく相変わらずだな、シグナム…：その癖はどうにかならないのか？」

「その癖とはなんだ？それよりも早くはじめるぞ！」

そんな訳で俺とシグナムは空中にいる。もちろんバリアジャケット

を着ている。

「ルールは戦闘不能か降参させた方の勝ちだよ。二人共、準備はいい？」

「「おう（大丈夫だ）」」

「じゃあ始めるね、レディーゴー！！」

合図がかかると同時にシグナムが斬りかかって来た。それを魔力で作られた双剣で受け止め、激しい打ち合いをはじめた。

side out

ティアナside

いま私の上空では二人が打ち合っている。シグナム副隊長も強いけど如月さんも強い。しかしあの人はデバイスを持たずにどうやって戦っているんだろう

「なのはさん、如月さんはデバイスを使わないんですか？それ以前のあの人はどうやって戦っているんですか？」

「優君は昔から魔力の使い方が上手でね、あれは自分の魔力を双剣の形にしているんだよ。だから基本的にはデバイスは使わないんだ」「そうなんですか…」

（やっぱり凡人は私だけか…）

side out

空中では両者共に一步も譲らない戦いが繰り広げられていた。斬り、防ぎ、回避し、また斬る。何度もこの動作が繰り返されていた。

これじゃきりがないな…

一発かましてやるか！

優は一旦距離をとり双剣をブーメランのように投げつけた。その左右から襲ってくる双剣を落としたシグナム、しかし彼女の視界に優は居なかった

「おらあああ!!」

「くっ!」

そんなシグナムの上には魔力でできた巨大な剣を振り下ろしながら突っ込んできた優がいた。とつさにレヴァンティンで防ぐシグナムだが勢いを殺しきれず地面にたたきつけられてしまう。だがすぐに体勢を立て直すシグナムに地面に降りた優は少し驚きの表情を見せた

「まさか今のを防がれるとはな…だが次で決めさせてもらう」

「甘く見てもらっては困るな。いいだろう、受けてたとう!」優は左手に魔力でできた日本刀を持ち居合いの体勢をとる。シグナムもカートリッジをロードしレヴァンティンを構える

「紫電……」

「無限……」

—————

「一線!……」

「乱線!……」

両者が斬り合い沈黙が訪れた。いまだに双方共動かない。なのは達はどうなった分からずただ待っていた。そんな中…

「流石だな…如月…」

そう言っつてシグナムは倒れる。優は慌てて近寄るがシグナムの意識

がはっきりしている事を知り胸を撫で下ろす

『シグナムさん戦闘不能、よって勝者優君!』

n e x t

オリ主設定（前書き）

オリ主紹介です。短いのでできればもう一話投稿します

オリ主設定

名前：如月 優きんづき ゆう

歳：二十歳（なのは達と同級生）

身長：180？

体重：75？

髪：銀髪の短髪

階級：一等空尉

魔力：A+

魔力光：淡緑色

レアスキル：なし

バリアジャケット：白色のズボンに黒のTシャツ、黒のコートを羽織る。

なのは達とは小学校六年生の時に転入生として出会った。過去の話は後ほど…

無限乱線むげんらんせん

- ・ 魔力でできた日本刀を居合いの姿勢で構え、振り抜くと同時に魔力を一気に放つことで無数の斬撃をくり出す。
- ・ 魔力を多くすることで斬撃の数が増える。

デバイス：アイリス

インテリデバイス

待機状態：ブレスレット

戦闘時：変化なし（のちのちは…）

機能：おもに魔力の制御・演算

疑問（前書き）

六話目です。今回は少しシリアスが混じってます。感想お待ちしますm（| |）m

疑問

優 side

模擬戦を終えた俺はシグナムに肩をかしてなのはとフォワード陣が
いるところに戻った。何か知らないがなのは少し不機嫌そうな顔
をしている

「すまなかつたな、如月。もう大丈夫だ」

シグナムは俺から離れて行く。それと同時にスバルが駆け寄って来た

「如月さん凄いです！あのシグナム副隊長に勝っちゃうなんて！」
「まあこれでも一等空尉だからな。ああそれと如月さんじゃなくて
優さんとも呼んでくれ。あんまり慣れてないんでな…ティアナと
エリオとキャロも頼むよ」

「……はい！」「……」

「たく相変わらず元気だな、こいつらは。これも若さ故だな…」

(何言ってるんですか、マスターだって充分若いですよ)

(アイリス！？心読むなつての…っ！かこの絡みも何回目だよ…)

(長い付き合いですからね)

そんなやり取りをしているとスバルに変わりティアナが話しかけて
きた

「優さん質問していいですか？」

「なんだティアナ？」

「優さんはどうしてそこまで強くなれたんですか？」

こいつはどうしてそんな事を聞いてくるんだよ。まったく…

「どうして強くなれた、か……人は思い一つで変わることができる。俺から言えることはそれだけだ……」

「思い……ですか……」

ティアナは俺の言葉を聞くと何か考えるように俯いた。

求めていた答えじゃなかったみたいだな……だが俺にとってはこれが答え、これが俺の存在意義なんだよ

「さてと、模擬戦も終わったし俺はデスクワークでもしますかな。いいかなのは？」

「あ、うん。大丈夫だよ！じゃあまた後でね！」

「……お疲れ様でした」「……」

「おう！」

side out

なのはside

「皆、さっき模擬戦を見てどんな事を思った？それをレポートにまとめて提出してね」

「……はい！」「……」

「それじゃ今日の訓練はここまで！」

「……ありがとうございました！」「……」

フォワード陣はさっきの模擬戦について色々と話しながら自室に戻っていた

ティアナの質問に答えてた時の優君の顔、なんかとても悲しそうだった…私が知る限り心当たりはない…この四年の間に何かあったのかな…後でフェイトちゃんとはやてちゃんに聞かなくちゃ！

side out

はやて side

うちは今、

リンデイさんと通信と通信しとる。なんでもリンデイさんが話したいことがあるんやて

「それにしても急にどないしたんですか、リンデイさん？」

『ごめんなさいね、別に急に話すことじゃなかったんだけどね…話つて言うのは優君のことについてなの…』

「優君のついてですか？」

『うん、彼とあなた達は四年間会ってなかったはずよね？』

「はい、時々連絡を取るぐらいでした」

『そう…じゃあそれを前提にお願いするわ、優君についての四年間は詮索しないで頂戴』

「！？…どういう事ですか？この四年間で優君に何かあったんですか？」

なんやて！？今の言い方やと明らか何かあったって事や！そんな見逃せる訳あらへん！

『お願い、これは私が言っている事じゃないの。彼があなた達言い

出すまでは待つて欲しいの……』

「分かりました。ただ優君に何かがあったかどうかだけ答えて下さい」

『……何かがあったことは確かよ……それじゃこの話は終わりね』

「失礼します」

うちらにも言えん事ってことなんか……優君、この四年間で何かあったんや……

n e x t

暗躍（前書き）

七話目です

これから少しずつ優が動き出します。ちなみに今回も若干シリアスです。

感想お待ちしてます m (((m

暗躍

優side

シグナムとの模擬戦を終えた後、パソコンに向かいデスクワークをしていると通信が来た。発信者は…

「何か用ですか、リンデイさん？というよりあの事以外は考えられません…」

リンデイ・ハラオウン統括官だった。この人は俺にとって恩人のような人だ。色々と世話になった。色々…

『ええその事もあるんだけど……ごめんなさい…はやてさんに優くんの話、話してしまっただわ……』

「！？詳細についても？」

『いいえ、ただこの四年間の事を詮索しないでって言っただけ……』

まったくこの人は何をしているんだ…そんな言い方したら、いかにも何かありましたって言うてるようなもんじゃないか…

「はあ…まあいいですよ。あなたが言ったなら、あいつらも詮索はしないでしょ。それよりも仕事の内容を教えて下さい」

『分かりました、今回の仕事はある犯罪組織を壊滅させることです。その組織はこれまでいくつかの次元世界で臓器売買、快楽目的に幾度となく殺人を繰り返してきました。昨日、居場所が判明し相手が相手だからあなたに任されたという訳。居場所は後で送るから……』

「了解しました。改めて許可を…」

『はい、許可します……ごめんなさい、本当はこんなことさせた

くないんだけど…』

「あなたが気に病む必要はありません、それでは失礼します」

リンデイさんとの通信が切れる。それにしてもあの人はいつまでたってもお人好しだな。そんな人がよく統括官になれたもんだ。まあ俺もそんな彼女に救われたのだから何も言えないが……さてとデスクワークも終わったし、仕事にいきますか

(マスター、組織の居場所のデータが送られてきました。転移魔法で十分程で着きます)

(そうか…今回も頼むぞ、アイリス)

(はい…マスター、くれぐれも無理をしないで下さい…)

(ああ分かっている)

これで何回目になるか分からないが俺達はまた出向くのだ。辺り一面に鉄の香りが漂い、赤く紅く染まる場所になるだろう場所へと…

side out

はやて side

リンデイさんの話を聞いて、うちはなのはちゃんとフェイトちゃんを部隊長室に呼んで優君の事について聞くことにした。それが正しいことか分からへんけど……

「ごめんな、二人共。仕事があったやろうに…」

「大丈夫だよはやてちゃん。フォワード陣の訓練も終わったし」

「私も大丈夫だよ、はやて」

二人は微笑みながら言ってくれる。うん、やっぱり持つべきものは友

達やな！…おつとそんな場合やなかったわ

「そんなに重要な事やないんけどな。二人は優君がこの四年間、何しよつたか知つとる？」

「うゝん、時々連絡はしてたけど何してたかは知らないな」

「私とはかく仕事忙しいとしか聞いてないよ。どうしてそんなこと聞くの？」

二人にはまだ伏せとくべきかな…リンディさんにも釘打たれた訳やし…

「いや、ただ気になっただけや。やっぱ気になるやん？」

「まあそうだけど…なのはどうしたの？浮かない顔して」

うちの質問に答えた後、顔を曇らせたなのはちゃんにフェイトちゃんが聞く

「…実はね、模擬戦の後ティアナが優君に聞いてたんだ。どうやって強くなれるかって。その時の優君、なんか悲しそうだったの…だから何かあつたんじゃないかって…」

「…」

なのはちゃんの言葉に静まりかえる部隊長室。そんな部隊長室に話題の人、優君が入って来た…あかん、なんか気まずいわ…

「失礼します」

「どうしたん優君？」

「地上本部から仕事が入つてな、三日程空けることになるから報告に来たんだ」

「…分かった、気をつけてな」

「ああ」

「待って！」

それだけ言って出て行くこととする優君になのはちゃんが声をかけた

「優君、帰ってきたら少しだけ話さない？聞きたいことがあるんだ

…」

「…帰ってきたらな…」

部隊長室を出て行く優君、こちらはその背中をただ見つめていた。
その目に不安を写しながら……

n e x t

ファーストアラート(前書き)

八話目です

題名はアラートになっていますが、フォワード陣の活躍は書いてませんm(_ _)m

ファーストアラート

ティアナside

訓練（模擬戦の観戦）を終えた私達はデバイスマスターのシャーリーさんのところに来ていた。私達の新しいデバイスを受け取るためにだ

「これが新しいデバイス…エリオのストラダ以外はかなり変化してるわね」

「そうだね。ティアのクロスミラージュは二丁拳銃になってるし、私のマツハキヤリバーもなんか凄そうだし！」

そんな事を言いながらスバルは目を輝かせていた。何浮かれてるのよ、まったく…ちびっこ二人だって落ち着いているっていうのに…

「皆のデバイスにはリミッターが付いているから、なのはさんから許可をもらったなら私のところに来てね。リミッター外すから！」

「……はい！」「……」

それぞれが自分のデバイスを見ていると、突然警報が鳴った

「！？きつとアラートだわ。皆行くわよ！」

「……うん（はい）」「……」

やっときた初任務、気を引き締めなきゃ！ランスターの弾丸に貫け

ない物はないって証明するために…

side out

優side

俺がいるのはある廃墟。取り壊しが決まって半年経つがいまだに取り壊されていない。奴らにとって最高の隠れ家というわけだ

(ここが、組織の居場所か…アイリス、中に何人居る?)

(七人です。その中に魔導士が二人、質量兵器を持つのが四人います)

(そうか…人数が少なくて助かるぜ…さて正面から行きますか!)

入口である扉を蹴破る。こっちに気づいた犯人達はそれぞれ武器を構えるガンをくれていた

「なんだてめえ?ここはお前みたいながきが来るところじゃないんだよ!」

「うぜえな…管理局の者だ。おとなしく投降すれば弁解の予知はごくわすかだがあるぞ。おとなしく投降した方が身のためだ」

「誰が投降なんてするかよ!そうだ、いい事思いついたぜ。てめえをぶつ殺した後、てめえの生首を管理局に送りつけてやるよ。安心しな、臓器はちゃんと売りさばいてやるからよ!」

犯人達はリーダー格の男の言葉に同意し狂ったように笑っている。

この屑共が……

「一応警告してやったからな、これからは俺のやり方でやらせてもらう。死んでも文句言つなよ?」

「上等じゃボケ!」

犯人達は魔力弾や拳銃で攻撃してきているが一発も攻撃は通らない。なぜなら俺が魔力で作った盾によって全て防いでいるからだ。そんな犯人達は性懲りもなく打ち続けているが結果は変わらない…

「くそ、なんで当たんねんだ!? もつとだ、もつと撃ちまくれ!」
「そんなの当たるかよ。ファングイーター、セツト」

両手から粒子状の魔力を放ち、犯人達を取り囲む。犯人達は攻撃に意識が向いていて気づいていない

「これが最後の警告だ、投降した方がいいぞ」

「うるせえ! 死にさらせ!!」

犯人達は耳も貸さず、なおも攻撃を続ける…まったく馬鹿な奴らだ…投降すれば死ななくてすんだものを…まあどっちにしても死ぬのが早くなるか遅くなるかの問題だから、あまり意味はないが……

「……ファイア……」

放たれた魔力は杭のような形を形成し一斉に犯人達を貫ぬいていく

「ぎゃああああ!!!!」

「や、やめてくれえええ!!!!」

犯人達の悲鳴が止むとそこは辺り一面、血溜りとなっていた。だいたい死んでいるが生き残っている者がいた。リーダー格の男だ

「た、助けて…くれ…な、なんでも…するから…」
「残念ながらお前達はすでに生存権を失っている…だからここで死ね…」

魔力で剣を形成し男の首に当てると男は遂に喚きだした

「か、管理局の人間が…こんなこと…」

「悪いな…俺は裏の人間だから、殺しをしても問題にはならないんだよ。じゃあな、罪人…」

「ま、待ってK………」

男が言葉を発することは二度となかった…

(…仕事は終わったな…)

(お疲れ様でしたマスター)

(ああお前もな…六課の連中はどうしてる?)

(今はレリックを回収しに任務に出ています)

(そうか…あいつらなら問題ないだろうが、一応行っておくか…)

「ムーブ…発動!」

—————

ところ変わって場所はリニア。俺が着く頃にはフォワード陣は無事にレリックを回収し後は引き継ぎをするだけとなっていた

(来る必要はなかったみたいだな…)

(そのようですn…!?マスター、ガジェット反応がフェイトさんの近くに!本人は気づいていません!)

(何!?! すぐに向かうぞ!)

side out

フェイトside

レリックも回収したし後は六課に帰るだけ、そう思ってた矢先だった

『フェイトちゃん、後ろ!』

なのはから突然の通信に反応し後ろを見ると攻撃をしようと突っ込んでくるガジェットがいた。間に合わない、そう思い目を瞑った。…が来るはずの衝撃はいつまでたっても来ない。目を開けるとそこには私の肩を左手で抱き、右手で防御している優がいた。攻撃を防ぐと同時に淡緑色のスフィアがガジェットを撃ち落とす

「大丈夫か、フェイト?」

「う、うん／＼／＼ありがとう、優／＼／＼とところでどうし優はここに?」

「仕事が終わったからな、アイリスから状況を聞いて顔を出したって訳だ。さてとガジェットの反応もないしレリックも回収したようだし帰るぞ」

「うん、そうだね!」

n
e
x
t

s
i
d
e
o
u
t

ファーストアラート（後書き）

技説明

ファングイーター

- ・ 辺りに放った魔力を杭のような形にして飛ばす。
- ・ 形のイメージはフェイトのプラズマランサー。
- ・ 数を少なくすれば複雑な動きで放つことができる

ムーブ

- ・ 転移魔法
- ・ 時間をかければかなりの距離を転移できる

日常

優side

フォワード陣が自分達にとっての初任務を終えたの次の日、俺はシグナムとヴァイスと共にフォワード陣の訓練を見ていた

「それにしてもあいつらかなり張り切ってますね。」

「初任務がいい刺激になったのだろう。まだまだ未熟だがな…」

「自分達でも任務を成し遂げることができ、そう思い体験したことで自信がついたんだろうな。」

スバルやエリオ、キャロはそれぞれが新しく思う所があったんだろう…ティアナに関しては…まあ俺が首を突っ込まない程度で済めばいいんだけどな…なのは気づいているのだろうか…

「そうっすね、そういえばシグナム姉さんと旦那は訓練に参加しないんすか？」

「私は古い騎士だ、高町のように何かを教えることはできない。教えられることは、懐に入って切れ、それだけだ。」

「それがある意味で最強なんっすけど…旦那の方は？」

「俺はなのから頼まれた時に見てやるだけだ。まあそろそろ頼まれるだろうがな…」

「そうっすか…じゃあ俺はへりの整備に戻りますわ。あいつらのこと宜しく願います。」

ヴァイスは俺達に敬礼するとその場を立ち去った。あいつも過保護だな、いや面倒見がいいと言っておくか…あいつも前に進めればいいんだが、まあ無理もないか…

「ところで如月、お前は昨日どこに行っていた？」

「地上本部からの仕事でちょっとな…あまりたいした事じゃないから気にしないでくれ。」

「そうか。」

シグナムはそれ以上追求して来なかった。たいした事じゃないか…本当にそう思えるならどんなに楽なことか…まあ俺がこの罪を背負わなくて済む日が来る訳ないが…

side out

なのはside

今日から個人演習になって、今はティアナに付きつきりで指導している。スバルはヴィータちゃん、エリオとキヤロはフェイトちゃんが見てくれる。

「こら、ティアナ！動き回ったらだめだよ！」

「はい、すみません！」

昨日の初任務のおかげでフォワードの皆のやる気が高まって訓練も順調に進んでる。この調子だったら明日からでも優君に見てもえるかな。

「皆集合〜！訓練お疲れ様！」

「「「「お、お疲れ様でした〜」「「「」

「やっぱり個人的な訓練になるとちよつときついかな？」

「は、はい」

「ちよつと言つよりかなり…」

フォワード陣はかなり堪えているみたい。でもこれも皆のためだから、これからもしっかりと訓練メニュー考えなくちゃ！

「じゃあ今日はこれで解散にするね。明日も訓練頑張ろうね！」

「「「「はい、ありがとうございました！」「「「」

フォワード陣は疲れた様子で自分達の部屋に戻って行った。さてとフォワード陣の訓練も終わったことだし…

『…なのはか、何か用か？』

「うん、前に言ったよね帰って来たら一緒に話そうって。だからこのあと時間あるかな〜と思って」

『ちよつと待つてくれ…そうだな夕食後でいいなら大丈夫だ』

「分かった、じゃあとで私の部屋に来てね」

「りよ〜かい」

…やった！！ようやく優君とゆっくり話せる。この四年間もだけど六課に来てからもあんまり話してなかったし。それに聞きたい事もたくさんあるから……

side out

フォワード陣の訓練を見るのを途中で切り上げ、仕事に行っていた日の分のデスクワークをやっていると通信が入った

「…なのはか、何か用か？」

『うん、前に言ったよね帰って来たら一緒に話そうって。だからこのあと時間あるかなって思ってる』

話か…この四年間の事、色々と聞いてくるんだろっな。うまく誤魔化さないとな…それにしても訓練後つてのに元気だよなあ、まあ教える側だからそんなに疲れないだろうが…さすがはワーカーホリックだ

「ちょっと待ってくれ…そうだな夕食後なら大丈夫だ」

『分かった！じゃあとで私の部屋に来てね！』

「りょっかい」

はあ…まだまとめないといけないレポートがあるんだけどな…っ！か年頃の女が男を部屋に呼ぶってどうよ！？下手すれば俺は社会的に殺される…

（いやらしい事を考えないで下さい。それでもあなたは私のマスターですか！？）

（有らぬ誤解をするな！俺はそんな事一切考えてないぞ！）

（女性に興味がない…そうですか、マスターはこっち系だったんですね？）

(だから…はあもういい、お前との絡みは何か疲れる)

(お褒めに預かり光栄です)

(誉めねえよ!)

「まったくいつは何でいつもこんな絡みをしてくるのだろうか…ちなみに俺がこいつをデバイスにしてからはこんな事が日常茶飯事になっている。まあ俺も何気に楽しんでるんだが…」

(そんな事よりも、マスター。なのはさん達に話してもいいんじゃないですか？あの人達ならマスターのことを…)

痛いところをついてくるなこいつは…人が気にしていることを…

(…今はまだ…話すべきじゃないと思う…いつかは話さないといけないんだが…)

(そうですね…ならばやくデスクワークを終わらせて、なのはさんのところに行きましょう!)

(そうだな…)

—————

夕食のハンバーグ定食を食べた俺は今、若干気まずい状態でなのはの部屋を目指している。すれ違う女性職員が目が痛い…本人達にその気はないのだろうか…

「あれ、優!??どうしたの?」

そこにはフェイトがいた。どうやら今仕事が終わって部屋に戻る途中らしい。

「なのはから部屋に呼ばてな、何でも話があるらしいんだ」

「そうなんだ、なら一緒に戻る」

そう言いながら腕を絡ませてくるフェイト。おいおいこんな事してたら誤解されちまうだろ！

「まあいいか…それじゃあ行くか！」

「うん」

こうして俺達はなのはの元に向かった。俺達を見た瞬間、ひきつった笑顔を浮かべたのはが居るのも知らずに…

next

話(前書き)

十一話目です！

なのはのゲーム買ってきました！一日やりこみSTORYだけ全部クリアしました！

感想お待ちしてますm | | (m

話

なのは side

いつも以上に片付いた部屋で私は紅茶を作りながら優君を待っていた。部屋は特に散らかっている訳じゃないけど念には念をね それにしても優君を部屋に呼ぶって…かなり大胆だよね／＼

「そのまま流れで…んふふ／＼」

そんな事を考えていると部屋のインターホンが鳴った。優君が来たみたい

「いらっしやい 待ってて…：優君は何でフェイトちゃんと腕を組んでいるのかな？」

ドアを開けるとフェイトちゃんと腕を組んだ優君がいた。あれ、なんだろう…：体の奥深くから煮えたぎるものを感じるの…

「私達、恋人になっただ」

「何言ってるんだ！なのは、これはフェイトが勝手にしていることだから誤解するなよ！？」

「…優君、このあとゆっくりお話ししようね？」

「い、いやだかr…」

「い・い・ね？」

「は、はい…」

「それじゃあ椅子にでも座って待ってて、紅茶いれて来るから」
まったく優君つたら…でも油断してたらフェイトちゃんやはやてちやんに取られちゃう…なんとかしなくちゃ！

side out

優side

今俺はなのはに言われて椅子に座っているわけだが…絶対に俺は悪くないだろ！それで何で俺だけお話なんだよ！フェイトは着替えてくるって言うって隣部屋に逃げやがったし…はあ最近では疲れるな…

「お待たせ、

紅茶いれて来たよ」

「サンキューそれにしてもいい香りだな、その紅茶。」

「うん、この前シヤマルさんに貰ったんだ。なんでも有名なブランドの紅茶なんだって！」

確かにそんな感じがする。色は透き通っていて一切濁っていない。この香りを嗅いだただけどんな人でも心が穏やかになる、そんな上品なものだった

「お待たせ」

パジャマに着替えたフェイトが隣の部屋から出てきた。着ているのはオレンジ色のパジャマでごく一般的な物だ。ちなみに髪を結んで

いるリボンは外してありきれいな金髪が動く度に揺れている。

「似合ってるな、フェイト」

「あ、ありがと／＼」

頬を紅く染めながら俯くフェイト、それを見たのははとうも面白くない様子で頬を膨らませていた。ちなみになのはは赤色のパジャマを着て、こちらもリボンを取っていた。そんなのはが俺に詰め寄ってくる。

「ずるいよ、フェイトちゃんだけ！私は似合ってるの？」

「そんな訳ないだろ！？ただ言いそびれただけだよ。もちろんのははも似合ってるよ。つーか二人共可愛いんだから似合わない訳ないだろ！」

「「かわいい…／＼／＼」」

（マスターは「たらし」ですね）

（何言ってるんだ、そんなつもりは一切ない…）

（周りからはそう見られるんですよ、「たらし」さん）

まったくアイリスには一日に何回いじられればいいんだよ…

（最低十回です）

（心を読むな！つーか十回は多すぎだろ！？）

（これでも少なくしてるんですよ？）

（はいはい、そうですか…）

「ところで話ってなんだ？」

ベッドに腰掛けているのはに尋ねる。フエイトもその隣にいる。

「うん、あのね…優君に聞きたい事があるの。聞いてもいい？」

「答えられる範囲ならいいぞ。」

やっぱりな…うまく誤魔化せるといいが…というかやるしかない！

「優君、六課での生活はどう？」

「！？…かなり充実しているよ。人は皆優しいし、設備も充分整っているし、部隊としてもかなり優秀だと思うよ。」

いきなりは聞いてこないか…そこらあたりの配慮はできるようになっていたんだな…

「そうなんだ、良かった 多分六課の皆もそう思ってるよ！ね、フエイトちゃん」

「うん、はやてやシグナムをはじめ本当にいい人ばかりだよ！」

そう言っただけで笑顔を見せる二人。いい人ばかりか…確かにここはそうだな…ある意味羨ましいな…裏を知らない人間ってのは…まあこっちは自業自得だ…どうしようもない…

「それでね、これは一番聞きたい事なんだけど…優君はこの四年間、何をしていたの？」

「それ私も聞きたいなあ。たまにしか連絡くれなかったし、何をしてくれるか教えてくれなかったから…」

「何って仕事だよ、ある部隊で働いていた。あの頃はすごく忙しかったからあまり連絡できなかったんだ…」

実際、そうだったんだよ。三年前まではな…そう三年前までは…

「ホントに？」

「ああそれとも嘘に聞こえるか？」

「ううん、優君は嘘つかないもん。じゃあ最後の質問、この四年間で何かあった？あったなら教えて欲しいの…」

嘘をつかないか、今まではそうだったな…けどごめんな二人共…今初めてお前達に対して嘘をつかせてもらう

「…たいした事は何もなかったよ。至って普通の四年間だったよ…」

「…そうなんだ」

二人共なんか符に落ちない顔をしてるな…フエイトはそうでもないが、なのはは…少し感づかれたか？…詮索される前にさっさと逃げるか…

「おっと、もうこんな時間か。俺はそろそろ自分の部屋に戻るよ」

「あ、うん…おやすみ」

「また明日ね、優」

「おやすみ二人共…あと紅茶うまかったよ。」

さてうまく誤魔化せただろうか…もし感づかれてもリンディさんが話したりしなければ、ばれることはないだろう…いくらあいつらでも管理局のトップシークレットまで調べられないはずだ…

「よし、部屋に帰って寝ますか！」

「マスター、まだデスクワークが残ってますよ。」

「…そういえばそうだったな…今日は徹夜かな…」

三時間ぐらいは寝たらいいな…

side out

なのはside

最後の質問の時の優君、

少しだけほんの少しだけ悲しそうだった…四年前までは見たことない表情だった…

「どう思う、フェイトちゃん？」

「何があったのかは分からないけど、何かがあったことは確かだよね。優があんな表情するってことは…」

「それも私達に話せないような事…明日はやてちゃんに相談してみない？」

「そうだね、はやてなら何か知ってるかもしれないし！」

ねえ優君、あなたは何を隠しているの？…何を思っているの？…私達じゃ力になれないの？…

side out

next

出張任務？（前書き）

十二話目です

PV一万突破しました！

本当にありがとうございます！

来年は受験生なので更新はあまり出来ないかもしれませんが、これからも宜しく願いますm（| |）m

出張任務？

スバル side

私はいま、八神部隊長からの伝言を伝えるために男性寮のある人の部屋の前にいる。

「ちよつと緊張するなあ… 八神部隊長は部屋に居るって言ってたし… うん、大丈夫だよね！」

「スバル、何してるんだ？」

インターホンを押そうとしたその時、誰かに声をかけられた。振り返って見ると…そこには部屋に居るはずの優さんがいた。

—————

「出張任務？」

「はい、なんでもロストログアが観測されたりしいです。出発は二時間後なので急いで準備をしてくれて八神部隊長からの伝言です！」

部屋の外で話すのもなんだからということに優さんが部屋に入れられた。部屋には生活に必要な最低限の物しか置いてないようで、よく言えばきれい、悪いく言えば殺風景な状態だった。

「それだけのメンツが行くなら俺が行く必要はないと思うのだが… まあ行くしかないか。どこに行くかは聞いたか？」

「いえ、行き先については移動中に説明するそうです。なんでも優さんやなのはさん達も知っている場所だとか」

そうか、と言って何かを考え込む優さん。なんかこうして見ると優さんって頼れるお兄ちゃんって感じがする。まだ会ってそんなに日は経っていないけど…自分にもこんなお兄ちゃんがいたらいいなって思う。

「それじゃあ準備しますか。出張だから色々と必要だろうし…ありがとなスバル、伝言伝えにわざわざ来てくれて。」

「は、はい／＼／」

立ち上がった優さんは私の頭を撫でてくれる。ああずつとこうしていてほしいなあ。そうだ！

「あの優さん、一つお願い聞いてもらえますか？」

「ん？まあ俺にできる事ならな。伝言のお礼もあるしな。」

「じゃあその…優兄って呼んでいいですか？」

「…俺なんかでいいなら構わないぞ。」

「うん」

やった 前からお兄ちゃんっていう存在に憧れてたから、しかも優兄が私のお兄ちゃん…やっぱりうれしいな

「じゃあまた後でな、スバル！」

「うん、またね優兄」

side out

優side

何故かスバルが義妹になったんだが…こんな奴のどこがいいのだろうか…それに本当の俺を知ったらどんな反応するのかね…それにしても出張任務とは、面倒くさいな。しかも俺達の知っている所つて
いえば…

「準備する物つてそんなにないんだけどな。」

持っていく物つて言ったら仕事のとくにいつも持っていくサンングラスと通信機ぐらいだ。

「そろそろ行くか…」

—————

なのはside

私達は出張先で私とはやてちゃんの出身地でもある『地球』に来ている。はやてちゃん達とは後で合流することになっていて、今は現地協力者のアリサちゃんの別荘にいる。

「久しぶり！アリサちゃん」

「なのは！ずいぶん久しぶりね！」

連絡はたまに取っているけど直接会うことはそんなにないから会えて本当に嬉しい

「その子達はなのはの教え子？」
「うん、こっちはスバルでこっちはティアナ。」
「スバル・ナカジマ二等陸士です！」
「ティアナ・ランスター二等陸士です！」
「よろしくお願いします！」
「私はアリサ・バニングス、なのは達の幼なじみで現地協力者をやっています。」

良かった、三人共なんなく馴染めたみたいだね。まあ心配はしてなかったんだけどね。

「ねえなのは、向こうに居るのつてもしかして優？」

「うん、そうだよ！優くん！」手を振って呼んでみると湖を眺めていた優君がこっちにやって来た。

「久しぶりね、優。なんで声かけてくれなかったのよ？」

「二人でゆっくり話す事があるだろうと思って離れていたただだよ。俺が居たら話づらいだろ？」

「そんな事はないんだけど…。」

優君らしく気をつかってくれたみたい。優君はなんだかんだ言っただけでも私達の事を考えていてくれる。大切な物を守るためなら自分が傷つくのも構わない。そんな優しい人、だから私は彼を好きになつたのかもしれない…

「まあ何にしても久しぶりだな、アリサ。昔みたいにロングもいいけどショートも似合ってるな」

「い、いきなり何言ってるのよ／＼／」

しかも何気ない一言が乙女心を刺激する。アイリスが「たらし」と言っているのも頷ける。

「まあある程度話も済んだことだし、仕事に取り掛かるぞ。」

「うん、そうだね！まずはロストロギアが観測された場所やその周辺に監視用のスフィアを配置、その後は反応があるまで待機だよ。」

「了解（です！）」

それにしても優君は湖を眺めながら何を考えていたんだろう…どこか遠くを見ていた感じがしたけど…

side out

優 side

スフィアを配置した俺達は別荘に戻る前になのはの実家である『翠屋』に向かっていた。なんでもお土産を持って帰るらしい。

（優兄、なのはさんのご両親ってどんな人達なの？）

（ん？初め見たら驚くだろうな。まあ見てからのお楽しみだ。）

（ええ〜教えてよ〜）

（楽しみは後にとっておく物だぞ。）

そんなこんなで『翠屋』に着いた。相変わらず綺麗な店だよなあ。そういえば昔ははやて達とよく来ていたな。学校帰りに寄って雑談して…あの時間がずっと続いてくれたらどんなに幸せなことか…

「いらっしゃいませ〜ってなのはじゃない！」

「久しぶり、お母さん！」

出迎えたのはなのはの母親の高町桃子だった。最後に会ったのが四年前のはずなんだが：全然変わってない：なんでこんなにも若々しいのかね：

（若！）

（優兄、本当にこの人がなのはさんのお母さんなの？）

（ああそつだ。久しぶりに見たけどあんまり変わってないよ）

（！？優さんは前に会ったことがあるんですか？）

（まあな）

「そつちの二人はなのはの教え子？」

「スバル・ナカジマ二等陸士です！」

「ティアナ・ランスター二等陸士です！」

ティアナとスバルは驚きを隠せないらしく今だに桃子さんを見ている。しばらくすると店の奥からなのはの父親、高町士郎が出てきた。

「おお久しぶりだな、なのは！元気にしてたか？」

「久しぶり、お父さん！もちろん元気だよ」

相変わらず仲がいい親子だよな：桃子さんがこつちを見ている、どつやら気付かれたらしい

「貴方はもしかして優君？」

「はい、ご無沙汰しております。桃子さん、士郎さん」

「あらやっぱり！ずいぶん頼もしくなつたわね」

「まっただ。男らしくなつたな！」

「ありがとうございます。お二人も相変わらずお元気そつでなによ

りです」

二人には昔、よく面倒うを見てもらっていた。なのは達と仲が良かったのと俺に両親がいなかったからだろう。

「フェイトちゃん達とここで待ち合わせになっているんだけど、しばらく待っていて大丈夫？」

「大丈夫よ。ちよつと待っててね、お菓子と飲み物持って来るから」

「はい！」

「はい」

士郎さんに呼ばれた俺は今、高町家の道場にいる。俺達は正座をしながら向かい合っている。

「悪いね、呼び出してしまった」

「いえ気にしないで下さい。それで何のお話でしょうか？」

「ふむ、優君。人とは月日が過ぎるうちに変わっていくものだ。もちろんそれは大なり小なり全ての人に当てはまる…単刀直入に聞こう、優君この四年間で何があったんだい？昔と比べると今の君はまるで別人じゃないか！？なのは達も薄々気づいているのだろうが…」
まさか士郎さんにまで気づかれるとは…いやこの人だからこそ気づいたと言っべきか…

「多くは語れませんが…俺はもう表側の人間には戻れなくなってしまった…ただそれだけです…」

「そうか…詳しくは聞かないでおこう。だが忘れないでくれ、私達はいつでも君の味方だということを」

「はい、ありがとうございます。ではそろそろ失礼します」

その後フェイト達と合流した俺達は車で別荘に戻った。いづれ繰り
広げられる食事と言つ名の戦いが待つ場所へ

s i d e o u t

n e x t

出張任務？（前書き）

十三話目です

はあ〜2011年もあと一日を切っちゃいました…はやいものです
ね〜

出張任務？

優side

『翠屋』から帰って来た俺の目の前に広がっているのは、食事と言
う名の戦争だった

「ああ〜ヴィータ副隊長、それは私が育てたお肉ですよ！」

「ふん、お前が気を抜いているからだ…ってシグナム！アタシの肉
取るな！」

「そついうお前も気を抜いているからだ」

はあこいつらはもつと静かに食事ができないか…向こうのテーブル
は静かだつていうのに。ん？さっきまでこつち（戦場）にいたテイ
アナがあつちにいる、なるほど考えたな…なら俺も便乗させてもら
おうか

「俺もこつちで食べていいか？あつちではどうにも落ち着いて食べ
れそうにない」

「うん じゃあ私の隣に…」

「だめだよなのは！優には私の隣に座ってもらおうよ！

「なんだ…」

「なのはは優と午前中、一緒に行動したでしょ！」

「それを言われると…」

そんな訳で俺はフェイトの隣に座る事になった。ちなみに席順はフ
ェイトの右側にエリオとキャロ、左側に俺といたところだ。

「それにしてもこの焼きそば美味しいですね！」

「まあはやてが作った焼きそばだからな。あいつは料理が上手だからな」

「そんなに誉めても何も出らなくてそれにうちより優君の方が料理上手やる!？」

「え!？優さんって料理出来るんですか？」

「そうや、しかも三ツ星料亭の料理長が絶賛するほどやで!…久しぶりに食べたいな、優君の料理…」

「私も食べたいな、エリオとキャラも食べたいよね？」

「はい!」

いかん、この空気は…前にもこんな流れで料理を作らされた記憶がある…あれは中学三年の夏休みの時だったか…泊まり掛けで宿題をやるうと言つ事でフェイトの家に行つたはいいが、その日リンディさんがいなくて代わり俺が作ったんだよな

「はあ分かったよ、だがあまり期待するなよ？」

「大丈夫やって!優君の料理は何でも美味しいんやから!」

変なプレッシャーかけるなよ…キッチンにある大型冷蔵庫の中を見るとある程度の物は揃っていた。短時間でできるものって言ったなら…あれしかないか

—————

「お待たせ、時間があまり無かったからたいした料理は作れなかったよ」

「やつと来たな、優君 これはタルト？」

「ああ食後にはデザートがいいかなって思って果物のタルトを作ってみた。果物は一度それぞれのジャムに浸け込んだから風味が良くなっているはずだ」

均等大大きさに切り分け、皿に乗せて皆に配る。ちなみにこれを作るのにかかって時間は一五分とたったところだ

「……………いただきます」「……………」

「美味しい！？優兄これすごく美味しいよ！」

「ケーキ屋で売られていても不思議じゃないです！」

「……………おいしい！」

「ギガウマだ！」

「まったくだ」

「なんで男のあんたがスイーツ作れるのよ……」

「やっぱり上手だね優君は　こんど教えてもらわなくちゃ！」

「相変わらず優君の料理は絶品やな……うちやったらこんなもん作れへんわ……」

「これじゃあ旦那さんの方が料理が上手になっちゃうね……」

「うう、優に料理で勝てるのかな……」

後の二人の事は無視してかなりの好評価らしい。時間があればもう少しまともな物が作れたんだけど……

「さてと食事も済んだことやし、皆でスーパーセントウに行こか！

「スーパー？」

「セントウ？」

—————

ということまでスーパーセントウに来た俺達だが、今エリオが絶体絶命の状況に陥っている

「一緒に入ろうよ、エリオ君！」

「いや、僕は男の子だし…それにティアナさん達もいらっしやるから…」

「私は構わないわよ」

「そうだよ、それに前から頭洗ってあげるって言ってたじゃん」
「で、でも…」

エリオがいかにも助けて下さいという目で俺を見ている。しょうがない、助け船を出してやるか

「悪いな、エリオは俺が洗ってやることになってんだ。なあエリオ？」

「え？あ、はい！そ、そういうことなので失礼します」

そう言うやいなやエリオは脱兎のごとく男湯に走って行った。じゃあ俺も入るかな…

side out

フイットside

今、私となのはとはやては露天風呂に向かっている。久しぶりの温泉だからしっかりと堪能しようとはやてが言ったからだ

「久しぶりの温泉もいいもんやね〜」

「にあははは、ミッドには温泉ないからね」

「そうだね、ん？向こうに誰か居るみたい」

だんだん近づくとつれて視界がはつきりしてきた。そこに居る人が誰かと思っただけで見てみると…何故かそこには優がいた

「な、何で優君がここに居んねん!？」

「それはこっちのセリフ…お前らその張り紙見てみる」

優が指差す方向には一枚の張り紙があり、そこには『混浴』と書かれていた。ちなみにお互いタオルを体に巻いていたから裸を見られなかったわけじゃない

「しばらく来ない間に混浴になっていたんだな…」

「う、うん…そうだね」

私達は優と背中合わせになるようにお湯に浸かっている。好きな人だからと言って流石に向かい合うのは…／＼／＼なのはとやてもなんだからもじもじしてる…やっぱり意識したやうのかな…

「さて、俺はそろそろ上がるかな」

「あ、待って優!」

何故かとっさに優の腕を掴んでしまった。自分もで訳が分からない

「どうした、フェイト?」

「い、いや、あの…ちょっとお話ししない? 四人だけっていうのもあんまり無いことだし」

「それもそうだな」

と言っても話すことが思い付かない…ん、何か思い付かないかな…
ん

「ねえ優って好きな人居るの？」

あわわ、私ってば何聞いてんだろ…話すことが思い付かないとは言っても、咄嗟に出てきたのがこれなんて…

「好きな人か？それは恋愛対象ってことか？」

「う、うん」

なのはとはやても耳を澄まして聞いている。やっぱり気になるよね、自分の好きな人のことだから…

「そうだな、そういう風に思った人は今まで居なかったな…」

「そ、そうなんだ…」

「じゃあ俺は上がるぞ、三人ものぼせる前に上がれよ」

そう言っつて優は脱衣場に向かった。その姿を見ながら私達は押し黙ってしまった

「…私達は優君にそういう目で見られていないんだね…」

「せやね…あくまでこちらは友達同士なんやろか…」

「ちよつとシヨックかな…」

side out

優side

三人と別れ着替え終わった俺は今はロビーでコーヒーを飲んでいる。それにしても、恋愛対象として好きな人か…こんな人殺しが人を好

きになる権利なんて持っている訳ないだろ…お前らも本当の俺を知つたら…

(マスター、ロストログアの反応です)

(場所は?)

(ここからそんなに遠くありません)

(そうか、じゃあさっさと終わらせるか)

(はい、マスター)

(なんだアイリス?)

(そんなに自分を責めないで下さい。これはマスターのせいではないんですから…)

(だが俺が人の命を奪っていることに変わりはない…ナビ頼むぞ)
(了解…)

s i d e o u t

n e x t

出張任務？（後書き）

タルトは『焼きたてジャパン』を参考にしました。主に果物のところを。

出張任務？（前書き）

十四話目です

皆さんあけましておめでとございます！（一日遅れですが…）
今年はどんな年になるんでしょうかね？自分は受験です…

更新のペースは遅くなってしまいましたが、今年もどうぞ宜しくお願
いしますm（＿）m

引き続き感想お待ちしております（今まで来たことありませんが…）

出張任務？

優 Side

スーパーセントウを跡にしロストロギアの反応があった場所に来てみたはいいが…

「なんだこれは？」

「スライムみたいですね」

「ちよつとかかわいいかも…」

目の前には緑色のスライムがたくさんいた。どうやら危険を感じると分裂するらしい

「これじゃあどれが本体か分からないな」

「そうですね…」

「ティアナとキャラ口はどれが本体か探してくれ。俺達はできるだけこいつらの数を減らす」

「了解！」

それにしても面倒くさいな…普通に攻撃しても分裂しやがるし…スバルとエリオも苦戦しているみたいだし、あれを使うか…

「優さん本体見つめました！今、キャラ口が封印処理をしているとこ

るです」

「そうか、ご苦労様」

案外早く終わったな、もう少しかかると思っていたが…まあこれであとは帰るだけだな

—————

本来なら任務が終わったからミッドに帰らないと行けないんだが、今日は別荘で一泊していくことになった。なんでも騎士カリムの粹なはからいらしい

「なんや悪いな、うちらだけ休んでシグナムだけロストロギアの運送なんて…」

「いえ、気にしないで下さい。では行って参ります」

「うん、気をつけてな」

シグナムは一人、転送装置に向かいそのままミッドに行ってしまった。主思いだなシグナムは…まあ確かにはやては働きすぎだからな…

部屋に戻ってみるとなんと和やかな風景が広がっていた

なのは達はアリサ、すずかと昔話に花を咲かせ、フォワード陣はソファでのんびりとしている。ヴィータとリインはテーブルでアイスを食べていて、シャルルは…どうやら料理のレシピを見ているらしい

「優兄、何してるの?」

外のウッドデッキに座っていると、さつきまでソファにいたスバルが隣に座ってきた。なんでこいつはこんなに人慣つっこいのかね…

「何って…ただ月を眺めているだけだよ」

こうして地球の月を見るのもかなり久しぶりだしな

「そうなんだ…そういえば優兄って地球の出身なんだよね。昔のなのは達とはどんな関係だったの？」

「ん？そうだな…なのは達と出会ったのは中学二年の時だったかな。俺がこつちに引越してきて声をかけて来たのがあいつだった。んでよく遊ぶようになって今に至るって感じた」

「そうなんだ」

まあこつちに来て一ヶ月後ぐらいに俺が魔導士というのがばれたんだがな。それからはミッドでも一緒に居たな…というかほとんどあいつらと一緒に居た思い出しかないぞ…

「さてと任務前にご飯もお風呂も済ませたし、そろそろ寝よか！」

時計を見ると十一時だった。ちなみに部屋割はなのはとアリサとすずか、フェイトとエリオにキャロ、スバルとティアナ、八神一家となった。

「あれ、そうしたら優の部屋がなくなるわね…」

「俺の部屋はいいよ。リビングのソファにでも寝ればいいし」

「で、でも…」

「まあ気にするな。それよりさっさと寝るぞ」

そう言うとアリサは符に落ちない様子だったが自分の部屋に戻って

いった。

(マスター、夜這いしちゃいけませんよ！)

(するかよ、夜這いなんて)

(本当ですか？)

(本当だ！)

まったくよく喋るなこいつは…というか夜這いなんてしたら、社会的に終わってしまう。しかも半殺しされてしまう、あの三人に…

side out

はやて side

いつもより早めに寝ることが出来るはずだったんやけど…あかん、何や知らんけど寝つけんわ…皆を起こす訳にもいかんし、外でも散歩するとしよか…

皆を起こさんように出てきたんはいいが、どこに行こうかな…そうやあの海にでも行こか

うちらと優君が出会ったのがこの海鳴の海やった。優君が転入してきてその日の放課後、優君が一人でこの海を眺めとった。なんか物寂しい様子で…

「あれ、優君？」

「ん？はやてか…こんな時間にどうしたんだ？」

「なんや、寝つけんでな…そういう優君はどうしたん？」

「久しぶりにこの海が見たくなつてな…何せお前らとの思い出の場所だからな、懐かしくなつたんだよ」

「そうか…」

堤防に腰掛けてる優君の隣に腰掛ける。こうして見て見ると優君、暫く見らん間に凄くたくましくなつとる…体の大きさとかもやけど、何や大人の雰囲気をかもちだしとる。

「優君…」

「なんだ？」

「うちな、優君が起動六課に来てくれてとても嬉しかったんよ…それまで不安もあつたんやけど、優君が来てくれて安心できたんよ」

本当にありがたかった…やっぱり自分の好きな人やからかな…こういう風に思えるんわ…

「そうか、はやて…」

「ゆ、ゆゆ、優君？／＼／」

突然、優君が抱きしめてきた。おまけに頭まで撫でてくれとる…

「ど、どないし」はやて…よく今まで頑張つて来たな……っえ？」

「今まで辛い事がたくさんあったよな…『闇の書事件』で歩くロス
トロギアと呼ばれ…そんな中でも強く自分の信念を貫ぬいて来たん
だよな…ごめんな、隣に居てやれなくて…」

「ううん、そんなことないよ…それに今は隣に居てくれてるしな…」

あかん、こないな事言われたら今まで溜め込んで来た物が…

「だとしても今まで誰にも弱音を吐かずに居たんだろ？俺でいいな
ら受け止めてやるよ…」

「…ならちよつとだけ胸貸してな…」

その瞬間、大量の涙が出てきた…今まで我慢してきた分が全部…

――――

それから暫く泣いた後、ようやく涙が止まった。涙が止まったんは
いいけど、けっこう泣いてしまったせいで優君の服が濡れてしも
うた…

「ごめんな、服汚してしまっ…」

「気にするな。これからはあんまり無茶するなよ？」

「うん、時々こつやつて頼らせてもらっわ」

「ああ…そろそろ戻るとするか」

「そやね…優君！」

「？」

「ありがとな」

優君にこの四年の間に何があったかは知らん。変わった所もあるかもしれない。せやけど優君の優しい所は何一つ変わってへんかった…

「今度はうちが受け止めたるからな、優君…」

s i d e o u t

n e x t

出張任務？（後書き）

さて、どうだったでしょうか？

ちなみに今回で出張編は終了です。

なんかいい雰囲気になってしまいましたが、ヒロインがはやてに決まった訳ではありません

ではまた次回！

訓練（前書き）

十五話目です

なんか今回はアイリスが真面目になってしまいました

それではどうぞ！

訓練

優side

出張任務から帰ってきた次の日、その日の午前練から俺も教導に加わることになった。それで今はなのはと一緒にティアナの個人訓練を見ている。

「もつとよく、弾の動きを見て！」

「はい！」

今は放たれる弾に対していかに正確に最も有効な弾を撃てるかという基礎練をやっている。基礎中の基礎だがセンターガードにとってはとても重要な訓練だ

「はい、いったん終了！最初に比べるとだいぶ良くなってきたよ」

「はい、ありがとうございます！」

まあ確かに最初に比べると良くは成っているな…だが基礎練だけやっていてもな…

「優君から何かある？」

「ん？なかなかものに成って来ていると思うぞ。まあこの練習を続けてもいいと思うが…そうだな、試しに早打ちでもやってみるか」

両手から魔力を放ち空中に漂わせる。まあ初めてだから五十発ぐら

いでいいな

「え？ティアナにはまだ早いんじゃない？」

「ものは試しだよ。ティアナ、今から俺が魔力弾を連続で放つから全部撃ち落としてくれ。ちなみに弾道は全部直線的だから」

「はい！」

そう言つてクロスミラージユを構えるティアナ。まあこれを凌ぐことが出来たら上等だよな

「それじゃあいくぞ」

「お願いします！」

「ファイア」

今まで空中に漂っていた魔力が一斉にティアナに放たれる。

「くっ！！」

十発は難なく撃ち落としたが、二十発ぐらいから焦りが見えはじめた。

それなりに耐えているみたいだが、そろそろ限界か？残り十発程か、十分だな…

「そこまでだ」

「はあ、はあ、はあ」

終わると同時にティアナは膝を着く。まあこれはかなりの集中力を使うからな、無理もない

「どうだったティアナ、早打ちの感想は？」

「正直、今まで一番疲れました…」

「だろうな、これは一発一発をいかに集中して撃ち落とすことができるかが試されるものだ。最初で四十発も撃ち落とせたら十分だ。もっと自信を持っていいぞ！」

「は、はい！ありがとうございます！」

と返事はしたものの…本人は納得できていないらしいな…確実に力
はついているんだが…

「じゃあ俺はスバルを見てくるよ」

「うん、ありがとね優君」

「ありがとございました！」

その場を立ち去りながらアイリスに聞いてみる

（アイリス、お前から見てどうだった？）

（最初にしては良くやった方だと思います。ですが魔力のコントロールがまだ不十分ですね。それにまだ完璧に集中しきれていませんね）

（そうだな、近い内にやらかすかもな…）

side out

ティアナside

初めて『早打ち』をやってみたけど…全然付いて行けなかった…序盤はいいとしても、中盤はほとんど苦し紛れだった…それにまだ十発ぐらい残ってた…

「なのはさん」

「うん？」

「なのはさんは『早打ち』をやった事あるんですか？」

「あるよ、それもさつきと同じように優君にやってもらったんだ。

最初は百発中九十発ぐらいしか出来なかったよ」

「そうなんですか」

百発って…しかもなのはさんはそれが最初って言うってた…私の場合、百発もやったら…やっぱり私みたいな凡人はもっと頑張んなきゃ…

side out

優side

今、目の前でヴィータとスバルのぶつかり稽古があっている。正確にはヴィータの攻撃をスバルがプロテクションで防いでいるんだが…あ、スバルが吹き飛ばされた…どうやらプロテクションは壊れていないらしい

「プロテクションだけは丈夫みたいだな。ん？優じゃね〜か」

「よう、どんな感じだ？」

「まだまだだな。だが鍛えがいがありそうだ！」

「そうか「あ、優兄〜！」…はあ今は訓練中だぞ」

さっきまで林の中に突っ込んでいたスバルが俺に気づいて近づいてきた。

「おい、スバル。フロントアタッカーがあんなに吹き飛ばされてどつするんだよ」

「ううう…ごめんなさい」

まあ今の段階なら防ぐので精一杯か…

「もう少し下半身を意識してみる。そうしたらさっきのも止められるぞ」

「下半身？」

「ああそうだ。よし俺の攻撃を防いだら合格だ」

右手に魔力を集めて巨大化させる。ちなみにこれで五メートル程の大きさだ

「え？もしかしてそれを防ぐの？」

「ああそれ以外ないだろ」

「む、無理だよ〜」

「うるさい、いくぞ〜！」

「ちょ、ちよっと、うわあああああ」

スバルはさっきまでいた林の中に吸い込まれるようにして飛んできた

「優、あれはやり過ぎだと思っぞ…」

「いや、あれは俺がただ単にあいつのプロテクションがどんなものか知りたかったからやっただけだ。もちろん受け止められるなんて思ってないさ」

まああれだけの固さがあれば今のところは大丈夫だろう

「後は頼むぞ、ヴィータ」

「ああ任せとけ！」

さてとあとはエリオとキャロのところだが…回避行動ならフェイトだけで十分だろ…時間ももあるし、久しぶりにやるか

side out

なのはside

「皆、集合〜！これで午前練は終わりだよ」

「「「「ありがとうございました！」「」「」

「あれ、優君は？」

皆、集合しているのに優君だけが居ない。集合に気づいていないのかな？でも集合時間は前もって伝えてあるし…

「皆、見てない？」

「いえ、私達は……」

「僕達もです」

「おかしいな」

優の性格上先に帰るなんて事はあり得ないし……ん

「ねえねえなのは、もしかして優はあれをやってるんじゃない？」

「！そうかもしれないね。それだったら気づかないはずだよ」

なんたつてあれは『早打ち』以上の集中力が必要だからね

「なのはさん、あれって何ですか？」

「そっかフォワード陣は知らないんだよね、それじゃあ皆で見に行こうか！」

—————

木々が生い茂る林の中心にある開けたスペース、そこに一メートルほど淡緑色のタワーと優君がいた

「やっぱりね」

「あれは何をやってるんですか？」

「あれはね、魔力を一個五センチの小さいクリスタル状にして積み上げているんだよ」

「！？凄い集中力ですね」

「うん、昔は暇がある度にやってたんだよ」

私達がそんなことを話している間にもタワーはどんどん高くなっていく。そしてついにタワーの高さが優君の身長と並んだ。

「ふゝこんなもんか…ん？なんだ皆揃って」

「優君、集合時間過ぎてるよ」

「！？すまない、気づかなかった…」

「ううん、大丈夫だよ。じゃあ皆、これで解散にするね！」

フォワード陣は自分達の部屋に帰って行った。今は私とフェイトちゃん和優君しかいない。ヴィータちゃんは何でもはやてちゃんに呼び出されたらしい

「それにしても相変わらず綺麗だね、このタワー」

「そうか？」

「うん、久しぶりに見たけどやっぱりすごいね」

このままどこかの美術館にでも飾れそうなほど美しいタワー。ただどここの行く先は…

パチン…優君が指を鳴らすと同時にタワーの上部の方から魔力が散っていく。これはこれで綺麗なんだよね

「俺達もそろそろ戻ろう、集中力使ったから腹が減った」

「うん、そうだね。優君、お昼一緒に食べようね」

「あ、私も一緒に食べる！」

やった これで食べさせ合いができたなら…／＼でもフェイトちゃんも一緒にみたいだし…

side out

優side

訓練所を後にして自分の部屋に戻ろうと廊下を歩いていたら、ティアナがいた。どうやら俺を待っていたらしい

「優さん！」

「どうしたんだ？」

「あの…お願いがありました」

「お願い？」

お願いね〜あらかた自分に稽古をつけて欲しいとかだろっな

「もし良ければ私の自主練を見てくれませんか？」

「自主練？今の訓練だけで十分じゃないのか？」

毎日あんだけやっていて、よくこんな事が言えるな…

「なんだか自分が強くなっているって思えなくて…」

「そうか…少し考えさせてくれ」

「分かりました、それでは失礼します」

あいつがあんなに強さにこだわる理由…恐らくティーダの件だろうな…

(マスター、部隊長から呼び出しですよ)

(そうか…)

(お悩みのようですね？ティアナさんの事ですか？)

(まあな…これは俺がどうにかする問題じゃないと思っただよな。
これはあいつら…なのはとティアナの問題だ)
(そうですね、しばらくは放っておいてもいいんじゃないですか?)
(そうだな…)

何事も無ければいいんだけどな…一応、声だけはかけておくか

s i d e o u t

n e x t

訓練（後書き）

『早打ち』のイメージは英雄王の『ゲートオブバビロン』です

巨大化した右手は炎髪灼眼の『紅蓮』？のイメージです

次はホテル・アグスタです！

ちなみにこの話は短くして、魔王降臨をメインにします

では

ホテル・アグスタ（前書き）

十六話目です

すいません、かなりグダってしまいました…

それではどうぞ！

ホテル・アグスタ

優side

はやてに呼び出されて聞いた話によるとホテル・アグスタの警備任務があるらしい。そこでは危険性のないロストロギアのオークシヨンが行われるらしい。

「警備任務か、俺達の管轄じゃないと思うんだが…」

「ロストロギアが関与している以上しゃくないって」

「そつだな」

という訳で現在俺達はヘリで移動中だ。ちなみにシグナムとヴィータは先に行っているためここにはいない。あの時呼び出されたのはこれが理由か

「んで俺は何をすればいいんだ？フォワード陣と一緒に外の警備か？」

「ん？それはやなく…」

「シヤマル先生、その四つのケースはなんですか？」

「これは隊長達の仕事着よ」

(それにしても仕事があいつらのエスコートとはな…)

(いいじゃないですか！美人が三人も一緒なんですよ)

(はいはい…それよりアイリス。ここからは真面目な話だ。何か知らないが嫌な予感がする…だからいつでも『解放』できるようにしておいてくれ)

(！？…マスターの勘はよく当たりますからね…くれぐれも無理はしないでくださいね)

そうこうしているとドレスに着替えたなのは達がやってきた。

こうして見ると随分大人らしくなったな…貴賓にあふれているというか何というか…

「ん？どうしたんだ三人共、ボーとして？」

「！？な、何でもないよ…(優君のスーツ姿、凄くカッコいい…見惚れちゃった：／／／／)」

「はうう…(反則だよ…似合い過ぎてるよ／／／／)」

「な、何でもないで…(あかん…このまま抱き付いてしまいたいわ…／／／／)」

「そうか、それにしても三人共よく似合ってるな。綺麗だよ」

それを聞いた瞬間、三人の顔が真っ赤に染まる。そろそろ受け付けの時間か…

「そ、それじゃあエスコートお願いな」

「了解。それでは参りましょうか、お嬢さん方」

――――

会場に入った俺達は打ち合わせ通りに各持ち場に待機している

(マスター、外にガジェット反応です！今、守護騎士達とフラワー
ド陣が応戦しています)

(そうか…)

何もなければいいんだg…！？この魔力はティアナか！？馬鹿が…
無茶しやがって…

「アイリス、1%解放！」

「了解！」

「フラッシュムーブ！」

side out

ティアナside

私は証明しなきゃいけないんだ『ランスターの弾丸に貫けない物はない！』って！

「クロスファイアー…シユート！」

弾丸は順調にガジェットを撃ち落として行った。これなら行ける！
…そう思った矢先だ

「スバル!!!」

一発の弾丸が逸れてスバルの方に飛んで行った。無情にも弾丸はスバルに当たり爆発した…

しかし煙が晴れるとそこにはスバルを小脇に抱えた優さんがいた…

side out

優side

なんとか間に合ったな…くそ、頭痛えな…さつそく反動が来やがった

「優兄!?ち、違っんだよ!今のもコンビネーションの中で…」

「少し黙ってる…」

殺気を交えて言うとスバルは黙り込んだ…さてと…

「おいティアナ!お前は証明するんじゃないか?」ランスタ
ーの弾丸に貫けない物はない』と。なら今すべき事を考えて実践し
る!」

「!?は、はい!スバル行くわよ!」

「う、うん!」

これで大丈夫かな…それにしても、相変わらずきついな『解放』は…

(マスター、大丈夫ですか?)

(まあな…少し休めば大丈夫だろ)

(そうですねか…どうやら戦闘が終わったようです)

(そうか…じゃあ持ち場に戻るか)

どうせこの後なのはとティアナは話すだろうし…そこで一件落着となればいいんだが…

s i d e o u t

n e x t

ホテル・アゲスタ（後書き）

フラッシュムーブ

転移魔法以上の速度で転移。^{ムーブ}イメージ的には長距離テレポートです

模擬戦（前書き）

十七話目です

前話と同じようになりグダってしまいました。

それでは短いですが魔王降臨です。どうぞ！

模擬戦

優side

ホテル・アグスタの一件があつて以来、ちよくちよくティアナが自主練をしているのを見かける。今日も例のごとくやっていた

「ヴァイスどうだ、ティアナの奴は？」

「うお！？旦那ですか、驚かさないで下さいよ！」

「すまん、でどうなんだ？」

「四時間ぶつ通しっすね。一応休めとは言ったんっすけど……」

訓練があつた後に四時間……しかもそれを毎日……あんなんじゃないっかぶつ倒れるぞ

「そうか……ちょっと話してくるかな」

「お願いします」

近づく俺に気づいたティアナは一礼するがすぐに自主練に戻ってしまう

「なあティアナ、少し話さないか？」

「……分かりました」

俺達は置いてあるベンチに腰掛ける。ヴァイスは気を使ったのか校舎に戻って行った

「悪いな、自主練中に」

「いえ、それで何の用ですか？」

何かピリピリしてやがる。まあ自主練を邪魔されてる訳だしな…

「まずはごめんな、自主練見てやれなくて。以外と副部隊長って仕事が多くてな…」

「い、いえ。気にしないで下さい。私も無理を承知でお願いしたので」

まあ単刀直入に聞くのもなんだし、余談を挟んでみたが…以外に素直に答えたな…

「そうか、そう言ってもらえると助かるよ…なあこんな時間まで自主練してるのは何のためなんだ？」

「私みたいな凡人はこれぐらいしなないと強くなれないんで…」

自分を凡人って…まあこんな部隊にいたら、そう思ってもしかたないな…これが原因か…

「そうか…自主練をするなどとは言わないが無茶はするなよ。あと時間があったらなのは話し合ってみろ…何かが見えるかもしれない」
「はい、それじゃ自主練にもどりますね」

今のあいつに何言っても意味がないな…成り行きに任せるか…

「ヴァイス、悪いがティアナを見守ってやってくれないか？」

「うっすー！」

はあ…なのはにも言っておくか…確かこっちだったよな、あいつらの部屋は…

――――

ええ〜と…ここだな

「なのは居るか？」

『優君？どうしたの、こんな時間に？』

「ちよつとな…入ってもいいか？」

『うん あ、今ドア開けるから』

この部屋に入るのは二回目だが…相変わらず整理整頓されているな

「こんな時間まで訓練メニューを考えているのか？」

「うん、あの子達のためだもん！」

まったく…どんだけワーカーホリックだよ…こいつもいつかぶっ倒れるんじゃないのか…

「そうか、そういえばフェイトは…「なのは〜いま上がったよ」「…」

目の前には風呂から上がりタオルを一枚巻いたフェイトがいた…いかん、目が合った

「わ、悪い！」

慌てて体を後ろに反らす

「な、なんで優がここに居るのかな？」

「ちよつとなのはに話があつてな…」

やばい、気まずいぞ。非常に気まずい…フェイトは着替えに行ったみたいだが…そしたらなのはが話しかけてきた

「それで優君、話つて何？」

「ああそうだったな。なのは、フォワード陣の事どう思っている？」

「どつつて…皆いい子達だと思うよ。何事にも真面目だし」

上っ面でしか見てないってことか…それで行き違いの発生といったところか…

「そうか…時間があればあいつらと話し合つてやつてくれ。お互い
に知る事があるだろうからな」

「う、うん」

「まあ話つていづのはそんだけだ。そろそろ帰るよ」

俺にできるのはこれぐらいだな…あとはあいつら次第だ…

—————

そして数日が過ぎ、今日は模擬戦。今はティアナとスバルの番なんだが…

馬鹿かあいつらは…あんな無茶苦茶な動きしやがつて…結局話し合
つてないのかよ…

(アイリス、いつでもムーブができるようにしておいてくれ)
(了解)

ん？ティアナが砲撃だと？いや、あれはフェイクか…本物は…なのはの真上！？あんなことしたら…

(アイリス、一発目は見逃すが二発目を打つようだったら行くぞ)
(いつでもどござー！)

結局こうなっちまうのかよ…

side out

なのは side

ティアナに二発目を打ったはずんだけど…煙が晴れるとそこにはティアナを小脇に抱えた優君がいた

「何で邪魔するのかな、優君？」

「…おいスバル、ティアナを医務室に連れていけ…」

いつの間にか私がかけたバインドが解かれている

「優君も頭冷やそうか…クロスファイア…シュート」

煙が晴れるとただ優君が立っていた。さっきの攻撃を防御した様子もない

「これがお前の教導か？」

「そうだよ……」

「違うな、こんなのは教導とは言わない……単なる暴力だ……」

うるさい……

「優君に何が分かるの……」

「自分の教導の意味も言わない奴の何が分かると言っただ？」

そう言っただけで近づいてくる優君

「うるさい……シユート」

確か弾は当たっているのに……尚も近づいてくる

「……言っただけで、話し合えって……お互い知る事があるって……話し合わなかった結果がこれか？」

「くっ……シユート……」

何で？何で倒れないの……生身でしかも五発以上打ってるのに……
遂に私の前まで来た……怖い……そう思ってたまらず目を詰った……
けどそんな私を優君は抱きしめた

「話し合わないと伝わらないこともあるんだよ……とくにあの年頃だと尚更な……後で話し合っただけよ？」

「……くっ、くっめんなさい……」

たまらず泣き出した私を優君は頭を撫でながら抱きしめてくれた

side out

優side

はあく模擬戦も中止になったしこれで一件落着だな…

部屋に戻ろうとしたら…ヴィータがなんかすっごい形相で俺を睨んでいる

「おい…大丈夫なのかよ？」

「何がだ？」

「惚けなよ！バリアジャケットも着ないで、なのはの攻撃をあんなに食らったんだぞ！っーかなんで立っていられるんだよ？」

普通に考えたらそうだよな…まあ俺は普通じゃないんだが…

「大丈夫だ、仕事に支障はきたさない。だから気にすんな」

「…分かった…」

以外にあっさりと引いてくれたな…まあこちらとしては助かるがな…

(アイリス、どんな感じだ？)

(整体維持機能70%、完全回復まで二、三日かかりますが日常生

活には問題ありません)

(そうか、部屋に戻ったら寝るよ。何かあったら起こしてくれ)
(はい)

さて戻るとするか

――――

「マ……」

ん？何か聞こえる

「マ……ター……」

うるさいなあ

「マスター、いい加減に起きて下さい！仕事ですよ！」

「ん？ああ悪い悪い…で何だ？」

どうも頭が回らないな…寝過ぎたか？かれこれ五時間ぐらい寝ていたみたいだ

「ガジェットです。どうやらこちらの戦略を調べに来たらしいです」
「そうか…」

遅れてるかもしれないけど一応行くか…

アイリスに起こされてヘリポートに来たが…何やってんだかこいつらは…

シグナムがティアナを殴ろうとするが、間に割り込んでその拳を止める

ちよつと締めか…

「何の真似d…」

「おいおい、任務中に私語とは…お前らどこに勤めているのか理解しているのか？」

その場にいる全員が押し黙る…まあこんだけ殺気を放っていたら仕方ないか

「ガジェット追撃には俺一人で行く。お前らは全員、待機している。行くぞヴァイス！」

「うっす！」

(なのは、あいつらに話してやれよ)

(え?…う、うん!)

さてとこれでホントに一件落着だな…さっさと終わらせますか…

side out

ティアナside

あの後、私達はなのはさんの過去と教導の意味を聞いた。それ自分達の事をいかに考えていてくれたかを知った。なのはさんには謝ったけど、もう一人謝らないといけない人がいる

「ここに居たんですか…」

「ん？ティアナか」

優さんは屋上で月を眺めていた

「なのはと話し合えたか？」

「はい、それと…すみませんでした。私の事、気遣って頂いてたのに…」

「まあ気にすんな。若い内は色々と学ぶもんだよ」

そう言つて優さんは頭を撫でてくれる…優しいな…この人は…

「あ、あの優さん…」

「なんだ？」

「えつと…その…に、兄さんって呼んでもいいですか？」

「？こんな俺でいいなら、いいぞ」

「はい！」

そして兄さんの腕に抱きつく。最初は兄さんもためらっていたけど、部屋に戻るまでずっと離れないでいてくれた

いっしょに私にとって激動の一日は幕を下ろした

s i d e o u t

n e x t

模擬戦（後書き）

次話からは
少しオリジナルストーリー
でいきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0251z/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

2012年1月4日05時49分発行